

學界近況

メンクスターベルヒ

昨年十二月十八日の大阪朝日新聞夕刊紙上に於て、米國ハーバード大學教授フーゴ・メンクスターベルヒ Hugo Münsterberg の逝去が報ぜられた。

氏は獨逸人で一八六三年六月一日、獨逸國、ダンツェヒ市 Danzig に生れ同地のギムナジウムを経て、ライプツェヒ、ハイデルベルグ等の大學に、哲學及び自然科學を修め、一八八七年にはフライブルグ大學の講師となり、一八九一年にはハイデルベルヒ大學の助教授に任命されたが翌一八九二年、米國ハーバード大學の招聘に應じ同大學の教授となつて心理學を講じ、且つ同大學心理學實驗場長として今日に至つたのである。氏は亦、一九〇三年から一九一三年迄 Harvard Psychological Studies の編輯を司つた。氏の著書は大體左の通りである。

Die Lehre von der natürlichen Anpassung in ihrer Entwicklung, 1885.

Die Willenshandlung, 1888.

Der Ursprung der Sittlichkeit, 1889.

Beiträge zur experimentellen Psychologie, 1888—92.

Aufgaben und Methoden der Psychologie, 1891.

Psychology and Life, 1893.

Grundzüge der Psychologie, I.: Die Prinzipien der Psychologie, 1900.

American Traits, 1902

The Americans, 1904.

Principles of Art Education, 1905.

Eternal Life, 1905.

Psychology and Crime, 1906.

Science and Idealism, 1906.

On the Witness Stand, 1907.

Psycho-Therapy, 1908.

Ans Deutsch-America, 1908.

The Eternal Values, 1909.

Psychology and the Teacher, 1909.

American Problems, 1909.

Subconscious Phenomena, 1910.

Psychology and Industrial Efficiency 1913.

Psychologie und Wirtschaftsleben, 1913.

Psychology general and applied, 1914.

Grundriss der Psychotechnik, 1914.

The Photoplay. A. Psychological Study, 1916.

キント

社會哲學者として有名な米國のメンシヤミン・キントは昨年十月二日、五十八歳で逝去した。

氏の最初の著書 Social Evolution, 1894 は逸早く、其のオリヂナリティーを認められ、最廣く識まれた。此の書の主意は、『宗教

は、科學や文明の敵に非ずして、寧ろ其の教義の倫理的原理は社會發達の最重要なる因素であつて、近代社會の進歩並に將來の發達の根柢と密接に結びついて居る。言ひ換へれば社會の進歩文明の發達の基礎は科學の進歩に存するものではなくて宗教的感情の連續的作用に依る』と言ふに在る。此の書の翻譯は獨、佛、伊、露等九ヶ國に及んで居る、氏の著書として有名なものは此の外に尙、

The Control of the Tropics, 1898

Principles of Western Civilisation, 1902 (Trans. Spanish 1903)

The two Principal Laws of Sociology, 1909 等がある。

又 *Encyclopaedia Britannica* の第十版には *The Application of the Doctrine of Evolution to Sociological Theory* の序論、同じく第十一版には *Sociology* について執筆して居る。それから一九〇八年、Oxford で催された Herbert Spencer lecture に於ては、*Individualism and After* と言ふ題下一一場の講演を行つた。

エミール・エルハアレン

戦争になつてから巴里に客寓してゐたエルハアレンは昨秋母國(ベルジウム)の爲に或演説會にのぞみその歸途誤つて轢死したといふ報知が傳へられたが如何なる演説をしたのか未だ詳報に接しないから一向わからない。

哲學者では無論ないが現代の一思想家として氏の略傳をこゝに掲げておく。

エルハアレンは一八五五年にアントワープに近いアルマントに生れ Gent にあるゼスウィットの宗教學校に入つた。その學校 (St. Barbe と云ふ) には偶然にも現代のベルジウム文學をして世界に重きをなさしめた四人の人々が机を並べて學んでゐた。有名なマ

ーテルリンクが初めローデンバッハ、シャール、ヴァン、レルベルグ、及びエルハアレンが殆ど同じ年頃の學生としての修尊院のやうなものさびた學校に學んでゐたのである。エルハアレンは其後ブラッセル大學で法律を勉強したがユーゴーなどの影響をうけてその頃から詩を作りはじめた。一八八三年にレ、フラマンド (*Les Flamandais*) といふフランドル地方の景物詩が出てから一八九三年頃までは主として敏感な詩人によつて感受せられた現代の憂愁がうたはれた。修道士 (*Les Moines*)、黄昏 (*Les Soirs*)、黒き炬火 (*Les Flambeaux Noir*) 道の傍 (*Aux Bords de la Route*) 等は皆この時代の作品である。然るに一八九〇年頃からエルハアレンノ詩風は一變した。彼れは現代の悲痛から免るゝために現代を逃避せずして却つて之を肯定した。現代はエルハアレンによつて新しき象徴として一種の價值を帯ぶるものとなつた。都會は「代文明の中心である。人々は田舎をすてゝ富と力との中心たる都會に集中する。都會を中心として交通の四通八達せるは恰も觸手ある動物がたえず餌をとり入れると同様である。迷されたる田舎 (*Les Campagnes Hahinées*) とか荒れ果てたる村 (*Les Villages Hirsouirs*) とか觸手ある都會 (*Les Villes Tentaculaires*) などといふ有名な詩は皆この社會問題を象徴してうたつたものである。氏の作品としてはこの外に二の劇とレンブラントに關する論文などがある。極めて感受性の強い人であつたと見えて冬になれば巴里に住み現代文明の渦中にまきこまれながらマーテルリンク、ロダン、ルモニエー、アンドレ、ギード、モッケル、カリエール、シニヤク等の人々と談論して暮すが、春になると眼には自ら涙がにじみ全身に一種の苦

痛を覺えて堪へ得られなくなるから海濱に移つて大なる自然の聲に耳を傾けたと云ふ。詩を作るにも多くは馬車の上とか散歩の途中とかで書くのを常とした。或人が彼れの詩には彼れの全身の血液が流れてゐると評したのも不當ではない。又、或人が彼れの詩は朗讀すべきものであつて默讀すべきものではないと云つたのも至當であらう。現代はエルハアレンによつて歌はれたがエルハアレンは現代によつて象徴せられた詩人であるといへば或は彼れの生涯を一言にして盡し得るかもしれぬと思はれるがそれはあまりに狭苦しいをして同時に廣漠すぎた批評であらう。

キエルペの後任 先年逝去した有名な獨逸の心理學者は Minchen 大學の教授に選ばれたと言ふ事である。氏は、"Gehirn und Seele, 1911" の著者として知られて居る。

彙報

○印哲 宗教學會

十二月十二日午後六時より文科第九教室に於て開會
 ○起信思想の背景 龍溪玄 深氏
 ○淨土教に於ける女人往生の思想 西山 聲氏
 ○西藏文佛所行讃に於ける馬鳴 寺本 講師

○教育學會

前學年幹事平内房次郎君の送別會兼忘年會を十二月十四日午後四時より學生集會所に於て開催
 ○エレンケイ、教育思想に就て 祝光次 郎君

○心理學讀書會

故文學士河内幸靈氏(明治四十五年卒業心理學專攻)の追悼會を十二月十六日午後一時より、百萬遍了蓮寺に於て開催、讀經、燒香後直ちに追悼講演會に移り、嵯崎學士は河内氏 卒業論文に就て詳しく紹介をなせり。

小西教授、平内君等の興味深き追悼談あり。膝を交へて思ひ出話に耽り、日暮れて散會せり。

○美學美術史研究會

十二月十六日午後六時より學生集會所乾室に於て開催、左の講演ありたり。

○美術批評の唯一途 ヲ學士 植田 壽藏君
 ○美學の基礎 文學博士 深田 康算君

○「近世心理學文庫」の豫約出版

文科大學に於ける心理學上の研究を收録せんがために松本博士主唱の下に『心理叢書』を實費出版しつゝある心理學研究會にては今回更にその姉妹篇として『近世心理學文庫』(全部十二卷)を公

にすべしといふ。該文庫は一般社會に向つて通俗的な興味本位實益中心の學術的讀物を提供せんがために公刊するものにして全部の豫約を申込むものには、學術普及のため實費を以て配布すべしと。詳細は東京上駒込心理學研究會に問合はさるべし。

寄贈書籍雜誌

靈光錄

文學士 栗原基著

東京麹町區平河町五 洛陽堂

自然科學者としてのゲエテ 小川政修著 同
近代音樂家詳傳 ロマン・ローラン著 同
基督の教訓及人格 柏井 園著 東京小石川區櫛木町六 北文館
心理研究、六卷雜誌、東洋哲學、東亞之光、早稻田文學、第三帝國、學校教育、教育、内外教育評論、普通教育、小學研、教育研究、教育界、信濃教育、宮城教育、丁酉倫理會講演集、神學之研究、東京教育、三重教育、愛媛教育、佐賀教育、鹽備教育、

前號目次

セザンヌ

美學の基礎に就ての考察

探究の態度と安立の態度

自覺に於ける直觀と反省(承前)

琉球過去の文化と教育

彙報——新著紹介

文學士 植田 壽藏

文學博士 深田 康算

文學博士 姉崎 正治

文學博士 西田 幾郎

平内 房次郎